やまなし歴史探訪❶

時を今につなぐあの日

写真提供：岩間裕夫氏

芦川渓谷で急傾斜地に落水管の取り付け作業が進む。すべて人力による事業で最上部の滑車と丸太の足場が難工事ぶりをうかがわせる。

明治33年5月10日、山梨県に初めて電気が灯った。

近代の夜明けは、芦川第一発電所から始まった。

「市中各町ともにことごとく国旗と軒灯をかけつらね、その繁華を集めたる。八日町、柳町通りは殊に人出おびただしかりしが、夜に入りては、常盤町電力会社の花灯最も人の目を引けり。」（明治33年（1900）5月12日付け山梨日日新聞）

市中常盤町（現：甲府市丸の内・中央）の甲府電力前に設けられた菊花を模したイルミネーションに、人々は目を見張った。菊花の御紋は、東宮殿下（後の大正天皇）の御成婚を祝したものであった。そのまぶしさは、今のクリスマスの夜の比ではなかったろう。こうこうと光るイルミネーションを見物に、八日町、柳町通り（現：甲府市中央）には大勢の市民がおしかけた。完成した芦川発電所（芦川第一発電所）から出力105キロワット、100サイクルの電力が、甲府と発電所からほど近い市川大門の街に供給された。県下で初めてついた電灯は、営業当初、甲府で882灯、市川大門で283灯、合わせて1,165灯。当時、一般的に家庭で使われた白熱電球は、110ボルト16燭光の国産化され始めた電球、現在の20ワットほどの明るさであったという。

初めて電力を供給した芦川第一発電所

県下で初めて電力を供給した芦川第一発電所は、日本でも三番目に古い水力発電所である。日本で電気事業が始まった当初の発電方式は、石炭を燃やし蒸気でタービンを回す火力発電。明治27～28年（1894～1895）の日清戦争後、近代産業の発展とともに石炭が高騰し、コスト安の水力発電がにわかに注目を集めるようになった。我が国初めての水力発電所は、明治24年（1891）に完成した京都の蹴上発電所。これらの動きに連動し、県内河川でもいくつかの発電事業の計画が持ち上がった。県都・甲府が、市制を施行して間もなくの明治22年（1889）、勧業製糸場が稼動し、産業が盛んになりはじめた甲府の街には、近代的な公官庁や学校、銀行が建ち並んだ。しかし、ハイカラな商家が並ぶ中心地を除けば、まだ市街地でも藁葺き屋根の民家が普通に見られる時代であった。

甲府電力会社を設立し、県下に初めて電気事業を進めたのは、市川大門出身の秋山喜蔵（1864～1932）であった。水力発電には、安定した水量と高低差がある水系が必要とされる。秋山は、くまなく県下の河川を調べた後、たまたま精進湖に遊びに来ていて芦川を下ったイギリス人牧師が、発電に最適だと薦めたことにより、芦川に発電所を造ることを決めたという。全体設計を大岡正に、水利設計は田中政次郎、電気工事は中村鎗吉に委託し、明治32年（1899）7月に起工、そして一年余で完成、使用水量毎分1.4立方メートル、有効落差27メートルの水力により105キロワットの発電を開始した。

県内各地へ、そして東京へ電力を供給

県内の電力需要は順調に伸び、明治39年（1906）には出力150キロワットの芦川第二発電所が完成。また前後して谷村電燈株式会社、桂川電力株式会社、峡西電力株式会社などが興され、各地の発電所から電力が供給され始めた。なかでも明治40年（1907）12月に完成した東京電燈（東京電力（株）の前身）・駒橋発電所（大月）は、出力15,000キロワット、55,000ボルトで、東京の早稲田変電所まで画期的な高圧長距離送電を始めた。東京の電気事業などを一手に支配したのは、若尾逸平ら甲州財閥と目される本県出身の企業家たちであった。大正間近の明治44年（1911）になると、まだ市部に限られるとはいえ、県下では、16,578灯、4,675戸の家に電灯がつき、屋外の外灯も384基になったという。

上／完成当時の甲府電力芦川第一発電所の内部。タービンのそばに立つのは技師。（写真提供：岩間裕夫氏）
下／明治40年、広里村（大月市）駒橋に完成した東京電燈駒橋発電所。東京電燈が建設した初の水力発電所で当時、日本最大の出力を誇り、76キロメートルを送電線で結び東京に電気を送った。（大月市制50周年記念誌より）

記事監修：山梨大学人間教育科学部　教授　齋藤康彦